

漱石の俳句

——“夢”の変容——

一

ロンドン滞在中の漱石が、この異郷の大都で、夢見心地にすごしたという形跡はまったくない。漱石は「夢」を見ることがさえ怖れる日々を通して、逆に、「夢」という内視鏡を呑む習性をつくり、帰国したのではなかったろうか。そして、そのときから、夢みることでふくらむことのない、意識の底におびえる自分を見つけ、夢によって自身の意識をのぞくことを怖れていたのかもしれない。怖れていたからこそ、怖れの原核が夢となって漱石に浮きあがったのか

もしれない。

漱石が「追われる」ものの不安をつのらせ、神経症を病んだことは知られている。異国の異人にかこまれ、その異容におびえるうちに、逆に、見られている「異」としての自分に気づき、自分のなかのおびえる「異人」を養ったようにもおもわれる。英京にあつて、こうした、みずからを「異人」の現身とみなす意識体験が深層に沈んでいくうちに、意識下に「百年前」の「自分」、いわば、自分のなかの異人を想定するようになったのかもしれないのである。いずれにしても、漱石においては、「夢」は自己凝視というきわめて集注的な、意識全体の重量をはかりうる、自覚

中村 完

された意識作業だったのである。

「夢十夜」のうち、第四夜ひとつ措いて、第一夜から第五夜までは「こんな夢を見た」という自己語りの形をとる。「こんな夢を見た」という「自分」の語りを分析心理学の尋常な基準に当てれば患者の自意識緊張の下降に伴うコンプレックスの夢による浮上となり、「夢」作者の作為とみれば、夢による異次元への他界行となるだろう。しかし、読者からみてうごかないのは、「こんな夢」の「夢」が、「自分」当人の「夢」による意識内下降にはかならず、そして、そこにいる異人がもうひとりの「自分」にはかならず、という診断・創作双方に共通する事実である。「こんな夢を見た」という「自分」の語りかけに応じて、夢のなかの「自分」に同行するうちに、夢検証者のつもりでいた読者はいつしか語る「自分」に同一化し、自分のなかの自分を見るという体験を共有させられることになる。

第一夜にしろ第三夜にしろ第七夜もそうだが、読者は「こんな夢」に同化することで、感染呪術のそれにうごかされたような意識状態になり、作品全体に対する側面観察の位置に自足することはむずかしい。語る「自分」の背後から「自分」の前方を見、足もとを見ることになるからである。

「自分」のうしろから女の「真黒な眸の奥」を見るのは「第一夜」、「自分」の背おう「子供」の背後から「杉の根」を見るのが「第三夜」、落下する「自分」の後から近づく海面を見るのが「第七夜」であり、とくに、「第三夜」と「第七夜」とは、意識による意識の糊塗をゆるさぬ、意識根源をひらく証例のそれであり、「夢」という名のCT分析なのだ。ひらいて見るべきものを見たが治療はかなわぬ、閉じることもできない、というわけである。夢は、まさしく、ひらくためのメスなのだ。

二

漱石は野間真綱宛の絵葉書（明治三十八年一月一日付）に「昔し大変な罪悪を冒して其後悉皆忘却して居たのを枕元の壁に掲示の様に張りつけられて大開口をした。何でも罪悪は人殺しか何かした事であつた。」と記した。一月四日の夢であつたろうか。

漱石がこの夢にどうおどろいたかはわからないが、この夢が何に起因するのか、「夢」の因果をさぐって、夢がそこから生起する意識下をうかがいはじめた、ということでは

あったろう。「夢十夜」第三夜のそれは、その「夢」凝視のはてに成ったはずである。そしてその「夢」反芻の途中で、漱石の意識に潜在する「人殺し」主題の民間伝承空間も浮上してきたにちがいない。とくに盲人殺し・盲僧殺しのそれは、漱石のみた夢中の原像をアクチュアルになざる力を貸したかとおもわれる。そして、「殺されたものの崇りが殺人者の子供に発現する。」⁽¹⁾というのが、この系統類話の作話原則である。「第三夜」の構造はその底を民俗伝承にひらいているのである。

「第三夜」の夢の次第はつぎのようになっていく。「自分」の背おった子供が、いつのまにか青坊主になっている。「自分」はその背おった子供の指示のまま、「青田」を抜け、「森」を通り、「杉の根」のところで、子供から「御前がおれを殺したのは今から百年前だね。」ときく。このとき、はじめて、「おれは人殺しであつたんだな」と「自分」は知る。石原千秋氏は右の次第を「小僧が他界と現世をつなぐ中有的存在である。」と特定し、この「中有的存在」のうながしによって「青田」から「杉の根」までの距離を歩くことが重要なのではなく、父親は『百年前』に向かって《鏡》の中を歩いている。」とする重要な見解を提示した。氏に

よれば、この「中有的存在」の指示によって「百年前」の再現するところ、すなわち、他界であり、父親の「青田」――「杉の根」間の行程は、かれの他界行だった、となる。これを私なりに作者の夢による意識下あるきととれば、「夢」という名の意識下透視レンズは、この「自分」の意識下の「百年」を個の夢自覚として集光し、さらに、その個の深層を通して民話伝統の他界的超時間を透過させている、ということになろう。

ここで、もういちど、憑依転生譚の「殺されたものの崇りが殺人者の子供に発現する」作業の基本を確認しておこう。

「第三夜」の作品としての構造は、「人が人を殺す」ことを始めて以来の人類の「原罪的不安」を歴史の「今」を生きたる個の根源の不安として描出した、すくなくとも、その側面図としては完璧であり、構造の底を民話の集合的無意識にひらいて深い。人を殺したかもしれない、殺すかもしれないという人間固有の不安、自意識から意識下におよぶ不安は、みごとに叙述されている。意識下の全域にひろがる不安を意識化する作業として完璧である。作品のこの完璧な形が、じつは、読者の意識を裂くのである。

民話のおおくは、殺しの因果をあかしたのち、あとを發

心譚や再生譚につなぎ、死から再生への循環回路を用意している。人殺しによって異化されたものが祟り、異化したものが祟られるという鉄則が生きているからである。「夢十夜」第三話では、「自分」の「一人の盲目を殺したと云ふ自覚」も、「おれは人殺しであつたんだと始めて気が付いた途端」、切つて落とされる。「人殺し」の痛覺をつつみとるような民話的救済は、ここにはない。「おれは人殺しであつたんだ」という自覺以後のそれは、漱石のなかに、どのような意識として残されたのであろうか。はつきりしているのは、作中の「自分」が「背中の子供が急に石地蔵の様に重くなつた」と感じて終つたあとをひきうけて、未生無限の重力に引かれて奈落におちる残像を想像するのは読者だ、ということだ。

第七夜においては、読者は、無限の重力にひかれて落下する「自分」と船と海をまとめて見る視点に立ったのち、落下する「自分」の背後に立つ視座に移り、最後は、ほとんど、「自分」と団体になり、「自分」とともに海面にちかづきつつ届かぬ宙吊りの状態に置かれるのではなからうか。その先を想像するのは、作品の外にもどつた読者の姿

意にすぎない。

「第三夜」「第七夜」にかぎらず、「夢十夜」の全体に共通しているのは、それぞれの「自分」はどこからきて、どこへゆくのか、起点も帰着点も不明だということだ。この「自分」の宙吊りのままの移動には、中有に置かれた魂の漂流といったところがあり、はやくに養子に出された漱石の出生以後の漂流に似た生存の刻印をそこにみる読者もある。さらにすすんで、この「自分」を通して自身の生存の漂流の軌跡を内視する漱石の眼が、世界史空間を宙吊りのまま漂流する日本の生存様態をとらえる、そういう先ゆきを予知する人もあろう。

いづれにせよ、「第三夜」や「第七夜」において、それぞれの「自分」のなかに、もうひとりの「自分」が現われ、人間という意識的生存の深さがその深さのまま描かれているのはたしかであり、この「自分」の残像が読者の意識下に残つて、読者自身の深層の自画像となることはまちがいない。

要するに、「第三夜」も「第七夜」も、「死」にひとしい意識の壁を前にしながら「死」の向こうをみる、いいかえれば、意識の極限をこえる最も怖ろしい意識の問題は「自

分」からはずされ、それをひきうけるのは、作品の外で待つ読者の方である。作者が最後に描きとめているのは、自力も他力もとどこぬ意識根源の未決拘留状態であり、そこまでの行程、「自分」のなかを降りてもう一人の自分に逢うまでの意識下降軸を意識全体をつかつて測定したのが「夢十夜」であった。そして「夢」が自己発見でもあり自己救出でもある以上、「夢十夜」の「夢」の半面は意識下への他界行でもあった。それでは、意識下の「他界」は「自分」のなかの「自分」をつつみうるものとして漱石に成立したであろうか。

三

他界がこの世の向こうにあるとして、そこへの往来を人間が想像力によって果たそうとするなら、意識のなかの他界に離脱するほかはない。漱石の「夢十夜」の「夢」による意識内下降もその形式をとっているのだ。はやく「他界に対する観念」にみられる北村透谷の他界観はその先駆といえるもので、その先駆の道を日本の現代状況にとざされるとき、一個の「異人」として、自己の意識下におりる経

過は透谷にもあったのである。「夢十夜」の「自分」像も、意識下という「他界」に降りて、そこにたたずむ「異人」の表象であったかもしれない。そして、透谷や漱石における「異人」としての他界志向は、国家に対する自己異化の筋道を通す作業に連動してはじまったものののだ。

明治以後の日本の近代化Ⅱ西欧化が「資本制産業化」によって〈制作〉文化を、異国民との接触によって〈異化〉強制を、対外緊張と階級分化によって〈支配〉原理を受け入れてきた³⁾とすれば、この三つのうち、〈異化〉コンプレックスは民族心理の深層をもっともふかくおりていく性質のものであった。天皇制国家としての日本が「異人」を容れない大家族共同体として、その同化還元機能を天皇に向かつて組みあげ、それに応じて民族心理全体の自己浮揚がはじまるとき、浮揚を拒否する個の意識は、それぞれの意識下に、つつまれることのない「異」としてのおびえを加重することになる。

俯瞰の位置に立つ「現代日本の開化」も、日本の伝統的生存がその根底からひらかれ、変容する事態をあやぶむ漱石のおそれをひそませていた。「現代日本の開化」という総括的な日本診断は、「西洋」の「現代」を呑む「日本」

の「現代」を、さらに個人の劇として意識の底まで呑み、そこから吐き出す、そうした漱石の心の流血を裏打ちとしたもののなのだ。「開化」の苦痛は自分をひらく苦痛だからである。個人の心の生態をひらく苦痛を代償として国家をひらく。この意味が極限の形で現われるのが作品「心」である。

日本が西洋との関係において国家をひらいていくおびえと、国家をとじるおびえとは、もつれながら一つの苦痛として、鋭敏な個性の意識下にふかく入っていた。透谷や漱石や柳田国男の日本診断のたしかさは、自己による自己診断におびえる、そのおびえのたしかさを支柱とするものだった。かれらの日本診断が、佐竹昭広氏のいう「想像力の共通基盤」として底流し、その「想像力」による「共通基盤」掘りおこしの血族として対立しつつ登場するのが、戦後世代の三島由紀夫や大江健三郎ということになる。

日本がそれ自体世界の異国として、異質の文明に照らされながら世界史の平面を漂流する、その漂流国家の暗部で、日本人個々の精神の漂流がはじまる。たとえば、「三四郎」の主人公は、観念としての「近代」にも、風俗としての「近代」にも酔いきれないものとして、なま酔いの都

市漂流をはじめのではないか。坪内逍遙の「当世書生気質」を基準としていえば、「世態」面を漂流するうちに「世態」下に沈み、そこで「人情」の異種・異人となる経過、それが小川三四郎の「人情」史ではなからうか。

文科系の学生のおおくがそうだったが、三四郎もまた、国家有用の括弧つきの「人情」形成にはじめから無関心であった。三四郎にとって大学とは何であつたのか。里見美禰子と出逢うための場所、このアイロニイの意味はふかい。このアイロニイを生きながら、その意味にきづかぬ三四郎の無自覚もふかい。かれの無自覚のふかさが、「それから」や「門」の主人公たちが常識人の外見の底に特別の人情をかくして生きる、その意識のふかさを予告するからである。

大病院・劇場・教会、これら、大学生にとって大学につぐ重要なトポスは、身体治療・観劇享受・悔悟洗心等、大学生としての自己育成・自己治療を助成する近代化システムとしての階梯を構成する。三四郎は大学構内で美禰子と遭遇し、大病院で美禰子と再会し、劇場で美禰子の婚約を確認し、教会で美禰子の「我が罪」をきく。大学以下、大病院や劇場や教会のそれぞれは、三四郎がわが愛の起

承転結を送迎し、心の傷を確認する場所なのだ。三四郎は、そうした意識の「迷羊」として漂流したあと、意識下に迷羊美禰子の記憶を残す。国家公認のシステムに出入りしながら、その機能を借りない。この非従属の自己本位を私が異化された「人情」史といったのは、以上のような意味からである。国家敷設の階梯を降りつくし、人間深所の「父母未生以前」の本来を生きながらたどる、その道筋そのものが自己異化の「人情」史となるのだ。

おおくの日本人が学習・治療・観劇・悔悟等、公教育のセツトする再生コースに適応して、「知る」力を知識の集積に向け、「迷う」ことから遠ざかって生きる「世態」の底で、漱石の主人公たちの「人情」は「迷う」ことを「知る」、「知る」ことで「迷う」というふうには、人間の心の基本の動詞を生きながら自分のなかに降れる。これが漱石のいう認識の自己本位であり、愛の自己本位であろう。ここにあるのは、人間が人間であるがゆえに人間のことで「迷う」という問題、そのおもしろい問題のおもしろさを「知る」ことによって自己の意識を掘りおこし、掘りかえずという問題である。

「三四郎」のおわるところで三四郎の意識下に美禰子だ

けが残り、代助の意識下の三千代が浮上するところから「それから」がはじまる。

四

代助が落椿の音をきいて眠り、醒めてその色と香りをたしかめる「それから」の冒頭は象徴的である。平岡からの葉書をよみおえた代助が「写真集」のなかの三千代らしい「廿歳位の女の半身」に見入る図も、代助の深層のアニメをうごかし、三千代の実像を増幅しはじめる、その意識下の「今」を告げているわけだ。美禰子に「迷う」ことの意味を「知る」経過を意識下にたたみこむのが作品「三四郎」の終局だとすれば、作品「それから」がそこから受けつぐ意味は、代助が意識下の暗室にとじこめた「自然の昔」を喚起し、世俗の是非をこえて三千代を「奪う」、その実行の敢行にきわまる。人妻奪還という男の愛の当為を「今」為すべき行為として強行したあと、その一回きりの「今」の記憶に復讐されるのが「門」の宗助である。「昔」に起因する「今」が「人情」の底を裂いて現われるとき、それは、人間生存の根底にあつて、そこから人間をおびやかす

「崇り」にひとしい。

「近來の近の字はどう書いたつけね」

「近江のおほの字ぢやなくて」

「其近江のおほの字が分らないんだ」

「此間も今日の今の字で大変迷つた。紙の上へちやんと書いて見て、ぢつと見てゐると、何だか違つた様な気がする」

「門」の冒頭、宗助・御米夫婦のこの尋常な会話の底に、二人が今もひきずる非常の「昔」が沈められていることには読者の誰しもが気づく。二人のうらぎった安井が、やがて、二人の近辺に現われるのも、その意識下の、とくに宗助の意識下の「昔」が「今」のこととして浮上するなりゆきと符節を合わせてのことなのだ。そして、安井は、言葉をかえていえば、宗助にその心の生涯を殺されたものであり、宗助は殺したものである。

漱石の意識下から「夢」として浮上した記憶「人殺しか何かをした」は、「夢十夜」第三夜で「おれは人殺しであつたんだ」という過去への遡源行として創作にひきだされたあと、「おれは人殺しとなりうるんだ」という人間根源の眩きとして漱石のなかにとどまったにちがいない。

たとえ夢のなかにしろ、人のなかの「人殺しになりうる」因が人殺しにひとしい行為に結果したとき、その果は加重因となつて、夢を見た本人に、人間固有の殺意のふかさを思い知らせるにちがいない。

三千代が子を生めぬ母となつたり、「貴方は人に対して済まない事をした覚えがある。其罪が崇つてゐるから、子供は決して育たない」と御米が易者からきく筋道も、奪うことによつて奪われる因果へのおびえをひきずつているのだ。そして、存在の根底に巣くうこのおびえも、漱石が夢を通して意識の底にきざんだ、あの不吉な記憶原基「人殺しか何かをした」の変奏として浮きあがつてきたのではなからうか。漱石における夢診断（自己内のぞき）は、それを一つの自覚の錘鉛として人間の深層におろし、さぐつていく、それ自体、人間生存の根源をひらく意識全体をかけたの作業だったのである。

代助は、やむなく友人の家庭をこわし、自身の安定を失う程度の、大家族制度不適応型の異人であり、世間に知られることを怖れる程度の異人である。安井をおそれる宗助も、小市民的安定を失う程度の自己隠匿型の小異人にほかならない。資産を持ち職をもたない「心」の先生は、友人

Kの生存の根底を犯したその加害の事実¹に自己の意識史の全体をもどし、自己内凝視をつづける人である。心の底を覗く心、この自覚された自閉症、徹底した垂直の自己限定を生きぬくそのことが、日本の民族心理の無自覚な自閉状態をひらくに足るひとつの心の形であることはまちがいない。それは、国民個々の「私」の發揮と「無私」の奉公との国家レベルへの一元化をはかるしくみのなかで、「私」に拘束される「私」を通すことで、あえて国家の「異人」となる、そういう意味をもった自己限定なのだ。

「私」から「無私」へ、という通りのいい、そうしたかけ声に乗って集団的陶酔におちいりやすく、加害者として鈍感になりやすい民族心理全体の動向のなかで、ひとつの「私」が「私」のなかの罪跡を見つづける、という想定。これになうのは自覚した個の内向の自己本位であり、この自己本位の基軸を意識の重心としてどこまでおろすか、これが真の課題となる。個の重心のふかさが民族心理における無重心の浮動を反映する、その比定が結ぶ重心こそ、後期三部作の重心にはかならない。

自己限定の窮極を生きたものの経験則が同族心理の肥大を裂く。「心」という作品は、一つの自己結晶がそのまま

自己分析のメスと化した作品にほかならない。「心」が「それから」や「門」とちがうのは、一つの意識を報告可能な形に限定していくその意識の詰め²の鋭さにおいてであり、徹底した詰めを意識の底におろすそのふかさにおいてである。「彼岸過迄」と「行人」の主人公が「それから」や「門」の主人公とちがうのは、かくした事故歴をなやむのではなく、自分の気質そのものの病歴をなやむその悩み方においてである。

「彼岸過迄」や「行人」の主人公が「迷う」のは自分の「考へる」力と「知る」方法についての不安からであり、「門」の主人公のそれは自分のなかの既往の事実を摘発される不安からであった。「彼岸過迄」と「行人」の主人公は、各自固有の経路をへて、それぞれ、自己認識徹底のはてに落ちこんだ意識の自縄自縛から自己解放に転じる。そしてかれらは、いずれも、自意識から意識下にとどく意識全体の解放回路をつくるまえに、「考へずに観る」「我を忘れる」意識休息の体験をもつ。「彼岸過迄」と「行人」、このふたつの作品は、主人公が、そういう意識休息を体験すること³で、意識下から自意識に向かって上昇する意識更新の回路を形成する。

漱石としては、「我を忘れる」ことのない徹底した自己記録「心」を書くまえに、二人の主人公に意識全体の充足を体験させる必要があったのである。

五

「門」連載をおえた漱石が持病の胃潰瘍をかかえて修善寺温泉に出かけたのは、明治四三年八月六日のことであった。そして、八月一七日の第一回吐血、一九日の第二回吐血のあと、二四日午後八時半、「五百グラムの大吐血、脳貧血を起し、三十分間人事不省に陥る」。いわゆる修善寺の大患である。医師・看護婦の即時の手当・看護があり、そのあと、醒めた漱石は駆けつけた妻鏡子の介抱を受ける。「九月八日より十月十日まで修善寺温泉」と頭書きのあるつぎの句群は、いずれも、漱石が意識の底に残した「人事不省」の意味のふかさを伝えているようにおもわれる。漱石の俳句は全集に収録されたもの二四三六句、かなりの秀句が各所に散在するが、群を抜く秀句となると、この「大患」後療養期の作品に多い。

別る、や夢一筋の天の川

秋の江に打ち込む杭の響かな
秋風や唐紅の咽喉仏

旅に病む夜寒心や世は情

洪水のあとの色なき茄子かな

肌寒をかこつも君の情かな

生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉

天の河消ゆるか夢の覚束な

骨の上に春滴るや粥の味

冷やかな瓦を鳥の遠近す

「人事不省」は意識の休止であつて、意識の死ではない。自意識の看視を抜いた無意識の状態ということであらう。

漱石は、「人事不省」、この純粹な無意識に入ること、意識全体のよみがえりを経験したのではなかったらうか。

「別る、や夢一筋の天の川」と「天の河消ゆるか夢の覚束な」とは、地上の意識休止の間に「夢」に乗って「天の川」まで上昇し、下降する、そうした夢想と実感を織りあげた天地往反の体験をかみしめる句として、対応しているのではなからうか。とくに、「生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉」には、前二句における天地往反の回路をかかえた漱石そのひとが、大地に立ち、「赤蜻蛉」と化して、心の丈い

つばいに「空の高さ」を測るような風情が如実である。

ここで、「行人」の長野一郎の語句「我を忘れる」を借りて、つぎの説明に移ろう。

長井代助や野中宗助を「我を忘れる」ことのない人物として心底にひきずってきた漱石は、「人事不省」となり、「我を忘れる」状態になったこのとき、はじめて、周囲のひととの懸命な「我を忘れる」好意のふかさをそのふかさのまま受けとることができたのであった。醒めて、そのことを知った漱石は、意識全体のやわらかな自足を体験したはずである。「旅に病む夜寒心や世は情」や「肌寒をかこつも君の情かな」は、無償の「情」に打たれて無条件にゆるむ漱石の意識の始動と流露を記録している。こうした意識のやわらかさは、当然のことながら、想像力の伸び、感覚の冴えとなつてあらわれる。そのあらわれとして、「骨の上に春滴るや粥の味」や「冷やかな瓦を鳥の遠近す」を挙げることができよう。意識の全体が大きいくういて、かつ、正確に焦点を定めたときにできる句である。

病中吟の第二群、帰京後の句作は、「十月十二日より十一月十五日まで胃腸病院」と頭書きのあるそれらである。

逝く人に留まる人に来る雁

思ひけり既に幾夜の蟋蟀

朝寒も夜寒も人の情かな

肩に来て人懐かしや赤蜻蛉

有る程の菊抛げ入れよ棺の中

風に聞け何れか先に散る木の葉

萩に置く露の重荷に病む身かな

「逝く人に」のそれは、「初め余の森茂さんを迎へたる時、院長はわざわざ電報で其地にて充分看護せよと電報をかけた。治療を受けた余は未だ生きてあり治療を命じたる人は既に死す。驚くべし 一句」の説明書きをもつ。「院長」とは、漱石が終始懇切な手当を受けた長与胃腸病院院長長与称吉のことである。句のなかの「逝く人」は長与院長、「留まる人」は漱石である。これからの命を託す人が逝き、「留まる人」となった漱石の不安は、致死のきわにとどまった直後のことだけに、心底につめたく、どこおつていったかとおもわれる。句群中、なかほどの「有る程の」句、これも、漱石にさきだち「逝く人」となった大塚楠緒子に手向けた三句の一つである。楠緒子が漱石の意識の底にどのようなものとしてありつづけたか、それを推定する確たる根拠はないが、呼びかわす双方の思いが尋常以上のもの

であつたことは想像できる。

こうしてみると、「風に聞け何れか先に散る木の葉」という一句に、延命のたよとした長与称吉や、生きることそのことをいたわり合おうとした大塚楠緒子の死に誘発された「留まる人」漱石の感慨がにじんでいることまちがいあるまい。「肩に来て人懐かしや赤蜻蛉」にしても、漱石がわが身を当てたこの「赤蜻蛉」は、今は、「空の高さ」を見上げるほどの上昇をしないのだ。

いずれにせよ、病吟第一群、第二群を比較するとき、「生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉」と心の丈を伸ばしきつた第一群にくらべて第二群が「仰ぐ」ことのない、萎縮した沈んだ心のたたずまいを見せ、寂寥の相におおわれていることは否定できない。「朝寒も夜寒も人の情かな」といった「人の情」を感じながらも、その感じをこえたところに淋しさもまた溜まっていく、といった様子である。「人の情」に寄りながらなお淋しい、といった心の様子は、まさしく、「肩に来て人懐かしや赤蜻蛉」の「赤蜻蛉」のそれである。

しかし大切なのは、漱石が、妻や家族の愛を受けた自足の上に孤独をひらいたあと、こうした寂寥にとざされなが

らも、その寂寥の自閉をひらき、寂寥なるがままの自足にいなおうとするときの、その意識の用い方である。「彼岸過迄」と「行人」の主人公が作品の終りちかく、それぞれの心の自閉をひらくのは、漱石が以上のような「大吐血」後の心理的推移をたどりながら、なお、自足自存の境地を離すまいとする意識の底からの希求を反映しているのではなからうか。

人の好意の無垢にひらかれた体験を土台に、とざされた自己本位をその意識の根底のところからひらいていく人物の造型に向かう。そういう心づもりは、すでに、「思ひ出す事など」をつづる漱石の心の底で始動していたのではなからうか。総括的な日本診断ともいうべき「現代日本の開化」も集約すれば、日本人の内発志向確立へのうながしである。日本全体の自己本位をになう日本人一単位の自己本位という根本の問題である。「西洋」を呑みおろすことが自己が自己を切りさく事態となる心の緊張をどうひらくか。漱石においては、意識の底から「夢」を通して内発する「陰呑なる自己」こそ、自己本位を内発するエネルギー核ともいふべきものであった。とすれば、この「陰呑なる自己」を外にひらき、休息をあたえ、エネルギー源として

更新することが必要であった。「彼岸過迄」と「行人」の

主人公が「現代日本の開化」の主題をになう人物として、人の愛や外界の自然にひらかれるのも、自己による自己の苦しい内発をたどる経過のはてにおいてであった。

「彼岸過迄」と「行人」、主人公のふたりは、それぞれ、外界の実景を「考へずに観る」、それを観ることに、「我を忘れる」ことを体験し、自己緊縛を自己解放にひらき、意識更新の回路づくりにまでいた。「地」に立つ「我」がそのまま「天」につつまれるといったかれらの自然感受をささえる天地の軸は、漱石の「大吐血」後の病床吟第一群をささえた、あの「天」―「地」軸とおなじもののよう

に私にはおもわれるのだ。

漱石は可能なかぎり「我」を大きくひらく「天」―「地」軸を用意した上で、一個の凝結した「我」の自閉の基軸をメスとして執りなおし、国家としての日本、民族としての日本人に当てる。漱石が「彼岸過迄」「行人」から「心」に反転する経過の底にあるものを私はこのように想像してみる。私の「夢」であろうか。漱石が意識下におろした「夢」は、「夢」をかかえて宙吊りになった日本の擬似安定をその底のところから反映する内視鏡だったのではなから

うか。

注

- (1) 小松和彦『悪霊論』(青土社 平成一・一〇)
- (2) 『夢十夜』における他界と他者』(『東横国文学』16 昭和五九・三)
- (3) 神島二郎『日本人の発想』(講談社 昭和五〇・九)
- (4) 佐竹昭広『酒吞童子異聞』(平凡社 昭和四二・一〇)